国書版

島木健作全集

第十一巻

島木健作全集

第十一巻

国書刊行会版

島木健作全集　第十一巻

昭和52年9月10日　印刷
昭和52年9月15日　発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発行者　佐藤今朝夫
制作・尾沼　汎

〒170　東京都豊島区巣鴨 3—5—18
発行所　株式会社　国書刊行会
電話（917）8287（代表）振替・東京5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第十一巻 目次

青服の人……三
出發まで……二七
雨期……六七
煙……一〇一
芽生……一三五

背に負うた子……一三九
蒲團……一六三
針……一八九
小さな妹……一九五
野の少女……二〇九
黒猫……二八九
赤蛙……三〇一
むかで……三一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジガ蜂……三二
名附親……三九
戦災見舞……三四
解題……三六

国書版

島木健作全集

第十一巻

青服の人

苗場信助が、はじめて滿洲の土地を踏んだとき、心を惹かれたものの一つは、滿洲土着の人の服裝であった。女の服裝のいいといふことは、人がみないふことであるが、男の服裝だってじつにいいと思った。袖も長く裾も長く、からだ全部をしっくりと包んでゐながら、少しも窮屈な感じがなく、ゆったりとしてゐる。だらりと垂れた感じで、一見、行動の敏速を缺くやうに見えるが、その實は、無用なひっかかりがなく、すべっこくて、いざといふときには、どんな邪魔ものの間をもするすると脱けて出られさうだ。日本服はむろん、洋服もその比ではない。滿洲人がその長身をくねらせて、何か仕事をしてゐるのを見ると、信助は、しんなりと腰の强い、どんな力でおさへてもじんわりと底から盛り返して來る、何かの軟體動物を聯想した。その感じは、服裝から來ると思った。服裝が、服裝としてもう眼につかない。まるで彼の皮膚のやうだ。

空氣が乾燥する、埃っぽい滿洲の風土や、不潔を不潔だとしてはゐられない生活狀態などが、自然に生みだした服裝だと思った。成程あれでなくては、平氣で地べたに坐ったり寢ころがったりは出來はしない。よごれもさほど眼につかぬが、よごれたってまた大した苦にもならない。服地のあの濃い青いろなどは、さういふところからも來てゐるのか。

見た眼にも決して美しくないとはいへなかった。形も色もじっによく周圍と調和した。手首から下までも、すっぽりとかくれてしまふやうな長い袖をだらりとさせて、裾の切れめを風に吹かせながら、のろのろとあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るいてゐるのも、この土地の環境のなかでは自然であつた。天も地も、すべてがぼうつとした灰色の取りとめない感じのなかに、濃い青いろの人を見るのは、眼がさめるやうだつた。ことに春の夕ぐれなど、ところどころ土糞がまるく積み上げてあつたり、起したばかりの畝が何百米も遠く地平とつらなる所までも續いてゐたりする畑の中の一本道を、――耕されてゐる畑はあるけれど、人家はどこにあるかわからないといふやうな所の一本道を、さういふ青服の人が、やはり悠揚とした足取りで行くのを見るのなどはよかつた。ほかの國のきものをその人に着せて、そこを歩かせる姿は考へられなかつた。

平常服ばかりではなかつた。勞働するときの服裝もとりどりにいいと思つた。ことに信助がほれこんだのは、百姓などがよく着てゐる、眞白なシヤツであつた。ごわごわした、見るからに丈夫さうな純綿で、袖は手首のところできつちりとボタンでとめ、襟は立つてゐて、丈は短い。シヤツと言つたが、それは日本人のちよつと目にさう見えるので、それがそれ自身獨立した上着であることはすぐにわかつた。それはきちんとしてゐて、凛々しく、ちよつと小意氣でさへあつた。一體に信助は、日本においても、彼の子供の時にはみんなが着てゐた、頭からかぶるのではない、袖口に白い貝ボタンのついたシヤツがなつかしく好きなのだ。北國で育つた彼は、寒さが近づく頃、母親から上等のフランネルか何かで今のシヤツをつくつて着せられると、それだけでもう正月が來たやうにほくほくした。それが段々さういふシヤツがなくなつていつた。賣つてもゐなくなり、家でもつくられなくなつた。面白くもない、窮屈な、メリヤスに代つてしまつた。兵隊だけに見られたが、それも今はどうかわからない。それでも信助は、數年前まで、彼の老母が生きてゐたときには、母にたのんでつくつてもらつて着てゐたものだつた。――しかしこの日本のシヤツは、どうひいき目に見ても小意氣だなどとは言へなかつた。野暮ったく田舍くさかつた。着もののあひまからそのシヤツの袖

や胸をのぞかせてゐると、若ものも年寄じみ妙におつさんおつさんして見えた。ところが、今滿洲に來てみる似たやうな着ものはさうではない。百姓の若ものなど、それを着てゐるといかにも氣がきいてゐて利巧さうである。夏、よほど暑くなつても、彼等はそれを着てゐた。その帆布かカンヴスみたいな感じの切地は、いかにも汗などはじきさうに見えた。

あれはああいふ仕事をする人々だけのものではない。自分たちにもいい。あれを着て、廣い部屋に机を一つ据ゑて、窓を明け放して書きものでもしたらさぞさつぱりするだらうと思つた。

一體に滿洲に働いてゐる日本人が、ある特殊な人々をのぞいて、滿人服を着るものが少いといふことに信助は不服なのだつた。彼の個人的好みであり、一番實用的であるといふことからばかりではなかつた。鄉に入つては鄉に從へといふこともある。滿洲へ骨を埋めるつもりで來てゐる筈の、そのことを世間に向つて揚言もしてゐるやうな人間が、日常生活の根本である衣食住において、滿洲人に同化し得ない、同化しようともしないなど、そんなばかなことがあるかと思つてゐた。こつちが同化するのでなくて、向うを同化させるのだなどと、生意氣なりくつを言つてはならない。こつちが向うの人間になりきる覺悟がなくてはならない。ここには行ぎ過きなどといふことはない。そんな徹底した奴などさうざらにゐるものか。本人が行き過ぎと思ふぐらゐで丁度入口だ。さうでなくて向うを引き上げることや、ほんたうの民族協和など、なんで出來るものか。

苗場信助は、滿洲事變後の影響を受けた、きほつたところのある、やや粗暴な、アジア主義的な青年だつた。

日の暮、信助は、先輩の奈良井半造と奉天の街を歩いてゐた。思ひ立つてふらりと出て來たはじめての滿

洲旅行が案外に長くなつて、もう二三日のうちに一先づ歸國しようといふ時だつた。
彼等はしようとる市場へ來た。大道にたくさんの夜店あきんどが出てゐた。なかには、あきんどとは到底言へないものもゐた。彼等は大地にあぐらをかいてゐる。漸く疊半枚ぐらゐのござの上が彼等のあきなひの場だ。そこにあるものは小さな空瓶とか、錆びた蝶つがひとか、尖の折れたナイフとか、緣のかけた茶碗とかである。かういふのは大抵老人で、誰が何といつてのぞきこまうとも、どこを風が吹くといつた、人を食つたやうな、行ひすましたやうな顏である。
「これで商賣になるのかね。」
「なるらしいんだから不思議だ。」
少し行くと木賃宿があつた。うす暗いなかをのぞくと、炕の上に、半裸體の男たちがごろごろとしてゐた。頭の眞白な、齒の缺けた男がひとり、窓にもたれて外を見てゐる。
「お前はなんだ。」と、奈良井が訊いた。
「乞食だ。」と答へて、にこにこつと笑つた。まるで邪氣のない、物慾から遠く離れた顏をしてゐる。
奈良井は先輩らしく女工店へ入つて、そこの炕に氣輕に腰をかけて女たちと話して見せたりした。女工店は、地方から職を求めて集つて來る女たちの一時の溜り場である。「福興女工介紹業」などと看板が上つてゐる。奈良井はいかにも女を雇ひにでも來たらしい顏をしてしばらく話した。
平康里のある街の方へ出て、そこを冷やかして、またもとの市場の方へ歸つて來た。平康里の女のあるものは、四つか五つの女の兒を膝の上にのせて愛撫してゐた。自分の兒だといふ。この兒が大きくなつたら、おなじこの商賣をさせて、養つてもらふのだといつてうれしさうだつた。わきにゐる朋輩が、うらやましさ

うに、自分も子供が欲しいといつた。歸らうとすると、女たちがどやどやと廣間に集つて來て、子供をなかにはさみ、圓いテーブルをかこんで飯を食ひだした。暗いかげなどは少しもない。苦海に身を沈めた、といふ氣持ではないのであらう。當り前の商賣の氣持であらう。誰でも出來る商賣ではない、といふ誇さへ持つてゐるかも知れない。

このあたりはともかくどこへ行つても黴のやうに根强い生活力を感じさせた。大地とともにあるものの感じだ。

「自殺したくなつたものは、ここへ一ぺん來てみるといいんだね。」信助はそんなことをいつたりした。

ふと、信助は足をとめた。人だかりしてゐる古着屋の前だつた。古着は山のやうに積まれて、若ものがそのなかから一枚づつ拔き出しては、長々と口上を述べて値段をいつてゐた。日本のテキ屋のやうに威勢がよくはない。まただんだんと値を崩して行くといふこともないらしい。口上はめんめんとして盡くることのない絲のやうである。それはうたふ調子である。日本でならば七五調とでもいふやうなものだらう。

信助は、人込みをわけて首を出し、しばらく見てゐた。その樣子が、だんだんほんたうに買ふらしく奈良井の眼に見えて來たので、奈良井はうしろから袖を引つ張つて、

「おい、どうするんだ？　買ふのか。」

「うん。」

「內地へ持つて行くのか。」

「さうだ。着て行くんだ。」

「やめろよ。」と、强く引つ張つた。

やめろといふのは、ここで買ふのをやめろといふのだと信助は思つた。こんなところで買はなくつたつて、もつといい店はほかにある、と土地にくはしい奈良井がいふのだと思つた。それでやめた。が、やがて話を聞いて、さうではない、ほかの理由から、ある一つの懸念から奈良井がいつたのだとわかつたとき、信助はまた大急ぎでもとの古着屋へ引返して來て、さきに買はうと思つたものを買つてしまつた。さきに買はうと思はなかつたものさへ買つてしまつた。何か大へんな意氣ごみやうだつた。

信助は奈良井のした話に、はげしく反撥したのである。

奈良井は、今の滿洲で、日本人が滿人服を着るといふことからくる不便さを、といふよりはそのためにひき起される誤解の馬鹿らしさを、自分の經驗やら人の經驗やら取りまぜて色々話してきかせたのだつた。たとへば汽車に乘つたとき、ただ單に滿人服を着てゐるといふだけの理由でどんなにへんな眼で見られねばならぬかといふことを、ひとが簡單にすましてもらへる調べがどんなにしつこくなされるかといふことを、それは滿洲國内においてもさうだが、日本へ歸るそれぞれの關門においてとくにさうである、彼の友人のある男などは、公職にあつて身分のはつきりしたものであるに拘らず、そのために狹い所へ入れられ、身ぐるみ剝がれて、どんなに徹底的に糺問されねばならなかつたかといふことなどを。

聞いてはゐられぬ非常識な馬鹿馬鹿しい話ばかりだつた。激し易い信助は、頭がくらくらしてくるほどだつた。

「ばかばかしい話ぢやないか、そりや。」

「ばかばかしい話さ。」

「日滿一體も何もありやしないぢやないか。」

「さうさ。」

「だまつてゐるのか、それを。」

「だまつてゐるといふわけぢやないが…。ともかくさういふことがあるんだ。爭つて勝つて見たところでどうなる？　むだに時間をつひやしていやな思ひをするだけがおちぢやないか。そんなめをしないやうにしたはうがましだ。」

奈良井だつてはじめつからそんな風な考へ方ばかりではなかつたらう。それがだんだんさういふ風に利巧な考へ方ばかりするやうになる。年をとり、經驗を積むとはさういふことだといふことになる。——信助はだまつてしまつた、

氣が變つて、二三日後には歸る筈だつたのを、そのまま滿洲の土地に居ついてしまつた。元來がさういふ氣まぐれなところのある男だつた。しかし奈良井の話をきいてむかむかした氣持が一つの刺戟となつたといふこともあるらしかつた。

何しろこの土地に居ついて働いてもらふ人間は何人あつても足りなかつた。彼は自らのぞんでハルピンからもつと北の方の田舍に行つた。あまり行き手のない所だつた。そこの協和會の職員になつた。

彼は決して和服も洋服も着なかつた。いつどんなときでも滿人服一つで押し通した。さうしてそれがまた彼にはじつによく似合ふのだつた。彼は寒い方のくにの生れであるにもかかはらず無髯で、粘液が過剩で子供の時からかつて赤味がさしたことはあるまいと思はれるやうなさえざえとしない色艶だつた。皮膚のきめはこまかでいつもあぶらがにじんでゐるやうであつた。手や足などもすぐにべとつく方だらうと思はせた。眼はよく見ると底光りがしてゐるが、ちよつと目にはどんよりとをどんでゐるやうだつた。子供の時から豚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com